日本IT書紀

165 １９６９・東大

09 玉鋺篇
巻之二十三 纏綿

佃 均

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。

第百六十五

１９６９・東大

一

一九六八年、ＩＴ産業はそれこそおもちゃ箱をひっくり返したような状況が生まれていた。

新しい会社が次々にできる。産業界にコンピュータがどんどん入り、コンピュータの市場規模はようやく二千億円に届き、富士通、日本電気、日立、東芝が相次いでに新機種を出し、ユーザー団体ができ、電電公社がデータ通信サービスを始めていた。

ばかりでなく――あまつさえ、と言ってもいいが――、世の中そのものが狂騒的な事態を迎えていた。戸谷深造がジェトロのウィーン機械センターで何を考えていようと、超高速電子計算機開発プロジェクトがどこまで進捗していようと、世の中全体から見れば取るに足りない出来事だったともいえる。

アラブ石油輸出国機構（ＯＡＰＥＣ）が設立され、テト攻勢でアメリカ・南ベトナム軍の劣勢が噂され、佐世保港に原子力空母「エンタープライズ」が立ち寄り、キング牧師が暗殺され、小笠原諸島が返還され、静岡の寸又峡で金嬉老が立て籠もり、成田では空港反対派の農民がデモを繰り広げ、ジョンソン大統領が北爆停止を発表し、パリが五月革命に沸き、板付基地の米軍機が九州大学に墜落し、封筒やハガキに郵便番号が付くようになり、和田教授が心臓移植を行い、ソ連軍がチェコに侵攻し、川端康成にノーベル文学賞が贈られ、明治百年祭が挙行され、東京・府中刑務所近くで三億円がまんまと盗まれ、学生が機動隊に向って石を投げ、ミニスカートが流行した。

このうちアラブ石油輸出国機構は、二十世紀後半の世界経済に新しい通貨の概念を持ち込んだ。かつて金が世界共通の経済基準だったように、原油というものが国家ないし地域の戦略的経済武器となったのだ。

先進工業国が石油への依存度を高めた結果、産油国が一バレル当たりの輸出価格をわずかに上下するだけで、世界の経済を支配することができるようになった。

それは同時に「持てる国」と「持たざる国」の新しい対立を意味していた。

工業国の少なからずは工業生産力と軍事力については「持てる国」だが、鉱物資源については「持たざる国」である。後進工業国は工業生産力と軍事力は脆弱だが、鉱物

資源や人的資源は潤沢だった。
ただし、どの場合も
――アメリカ合衆国を除いて。
という条件がつく。
政治と軍事における東西陣営の静かな争いの中で、北と南の機軸が明確になった。南北問題が経済の新しいテーマになった。
もうひとつの南北問題――ベトナム戦争――も新しい局面に入っていた。
ベトナムの言葉で旧正月を意味する「テト」の一月二十九日、北ベトナム軍とベトナム民族解放戦線（ベトコン）は八万の兵力をもって南ベトナム四十一都市と二十三か所の軍事基地を一斉に攻撃を開始した。
フエ、サイゴン、ダナン、ビエンホア、タンソニェット、ケサンなどでは激戦が展開され、市民を巻き込んだ泥沼状態が発生した。
「持てる国」であるメリカ合衆国とその支援を受けた南ベトナムの軍隊は、「持たざる国」の北ベトナムおよびベトコンの兵士たちが繰り出す肉弾戦に圧倒され、あるいは怖れた。
例えばタンソニェット空港の攻防戦は、北ベトナム軍とベトコンの兵士は合わせて一千五百人と工兵部隊一個大隊に過ぎず、武器は旧式の小銃と小型のロケット砲しかなかった。
守備に当たったアメリカ軍と南ベトナム軍は兵一万、さらに多くのジェット戦闘機、攻撃ヘリコプター、火砲を備えていた。にもかかわらず守備隊は敵の基地突入を許し、多数の航空機、火砲を破壊されてしまった。
サイゴンではアメリカ大使館が占拠されていた。
ベトコンの二十人の決死隊が正門を突破して館内に乱入し、アメリカ軍駐ベトナム軍総司令官のウェストモーランドは危うく人質になるところだった。ここでは四十五人の海兵隊がヘリコプターで屋上から侵入し、館内で四時間の銃撃戦を展開した末、ようやく奪回することができた。
テト攻勢で北ベトナムとベトコンは四万五千人以上の戦死者を出し、対してアメリカ軍と南ベトナム軍の戦死者は四千三百人だったから、作戦としては北側の敗北といってよかった。
ところが南側はメディアの攻勢を受けることになった。
南側兵士が戦死した北側兵士の所持品を略奪し、捕虜となった北側兵士を私刑にし、一万五千人以上の市民が犠牲になった。
――三十万人もの若者と太平洋艦隊の主力を投入していながら、北の大攻勢を許すとは何ごとか。

と合衆国のマスメディアは言った。

――わが合衆国がこれほど熱烈に支援しなければならないほど、南ベトナムは善良であろうか。

という問いかけは、アメリカ全土に厭戦の空気を醸し出した。

同年三月十六日、ソンミ村で虐殺事件があった。

ダナン南方約六十キロに四つの集落から成る戸数二百五十ばかりの小さな村をアメリカ軍第十一旅団の歩兵中隊が襲い、防空壕や自宅に籠もっていた村民五百四人を銃殺し、あるいは手榴弾で殺害した。

事件はしばらく秘匿されたが、六九年十一月、ある兵士の証言が報道されたことから明るみに出た。これを機にアメリカ本土における厭戦ムードは反戦運動に変わった。

ベトナム反戦の運動はアメリカ本土ばかりでなく、ヨーロッパ、日本でも盛り上がった。

もと宗主国であるフランスでは市民運動が政府を転覆させ、日本では「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）、全学連などが反戦デモを繰り広げた。

ともあれ、一九六八年という年は、

――これほど〔事件〕が多かった年は、過去になかった。

と誰もが思ったであろう。

だがその感想は、年が明けた一月早々に打ち消されることになる。狂騒には華々しい続編（別の見方をすれば〔終章〕）が用意されていた。

二

――いやはや、大変なことになったものだ。

これからしばらく、何回か名前が登場することになる人物も、そう思いつつ、テレビの中継に釘付けになっていたはずである。

中継というのは、東大の安田講堂の攻防である。

コトの顛末を書いたところで、だからどうだというわけでもないが、話のいきさつ上、書く。

発端は前の年の一月末、「登録医制度」に反対した医学部の学生が無期限ストに入ったことだった。折から七〇年安保問題が学生運動の焦点となっていた。

日米安全保障条約の改定に際し、労働組合や三派全学連は「即時破棄」を唱え、これを継続することは「米帝」によるベトナム侵略戦争に加担することであると断じてデモを繰り返した。

そういう時期だったにもかかわらず、在日アメリカ軍はヘマばかりやっていた。なんで輸送中の戦車が新宿駅構内で爆発したりしたのか、どうしてジェット戦闘機が、こと

もあろうに大学のキャンパスに墜落したのか、首相佐藤栄作は腹立たしかったことであろう。加えて倉石忠雄農林大臣が記者会見で

「現行の日本国憲法は他力本願である。日本には軍艦や大砲が必要だ」

などと発言したのは、あまりにもお粗末だった。

いや、あれはアメリカ政府の意を受けて国民の反応を見るための観測気球で、倉石も辞任覚悟の上で会見に臨んだのだった。

そういうこともあって、「登録医制度」反対に端を発した東大紛争は、あっという間に反米・反安保闘争の焦点に摺り替ってしまった。六月に安田講堂を学生たちが占拠し、いったんは機動隊が排除したものの、七月に再び学生が占拠したときには「登録医制度」の話題はどこかにすっ飛んでしまっていた。紛争は駒場キャンパスにも飛び火し、大学当局と学生のにらみ合いが続いていた。

一九六九年時点で、反米・反戦の学生運動は一般には「ゼンガクレン」の名で認識されていた。ところが厳密にいうと、これは間違いであるらしい。

「全日本学生自治会総連合」（全学連）は発足後十年の一九五八年に主流・反主流に分裂し、六〇年安保闘争のあと三つのグループに解体していた。諸派がそれぞれに「全学連」を名乗ったのは、宗教や古流武芸の本家争いにおける〝お題目〟のようなものだった。

解体した三つのうち一つは革命的マルクス主義者同盟（革マル）派だった。第二は日本共産党に近い日共系全学連（平民学連）で、その二派が「旧左翼」と呼ばれた。第三のグループは自ら「新左翼」を名乗った。

新左翼は中核派＋三派連合すなわち「社会主義青年同盟学生班」、社会主義学生同盟（社学同）、構改派をもって「三派全学連」を結成した。

この三派全学連もまた佐藤訪米阻止を唱えて行われた羽田闘争を経て六八年夏に分裂し、からくも「全国全共闘連合」としてまとまりを作っていた。

『新左翼理論全史』（新左翼理論全史編集委員会、一九七九、流動出版）巻末掲載の「全学連の系譜」によると、一九六九年時点の左翼学生運動は次のように整理される。一方に存在したのは革マル派全学連である。

また一方には全国全共闘連合があった。主要な党派は、革共同中核派、社学同、ＭＬ（マルクス・レーニン主義）派、学生解放戦線、日本共産主義学生同盟（共学同）、反帝学評、フロント、プロ学同であって、これをもって「全共闘八派」と称し、全国百七十八大学の全共闘が結集した。

中でも日本大学を揺るがし、中央大学駿河台校舎の中庭

を埋め尽くした〝白ヘル部隊〟（中核派）の力は侮れなかった。

ヘルメットを目深にかぶり、鼻から下をタオルで覆い、ビニールのレインコート、軍手に角材というスタイルの学生たち。そのデモを規制し解散させようとする機動隊との衝突は、珍しい光景でなかった。

東大闘争が全共闘の焦点だった。

六八年の秋に開かれた「自主駒場祭」では、仁侠映画で人気を博した高倉健を思わせる人物が背中の刺青を見せてにらみを利かせていた。

とめてくれるなおっかさん
背中のいちょうが泣いている
男東大どこへ行く

キャッチコピーとともに、そのポスターを描いたのは文科Ⅲ類二年だった橋本治である。別のところから主題を得て、それを揶揄的にモディファイする「パロディ」の最初だった。

――加藤一郎は貧乏クジを引いた。

と、テレビの前の人たちが思ったかどうか。

加藤一郎。一九二二年東京に生まれ、戦時中の特例で繰上げ卒業となった。特別研究生を経て三十五歳の若さで東大教授に任官した。土地、家族、農業、交通事故、公害・環境汚染、医事、金融など時事的課題に法律がどう対処すべきかを重視する利益衡量論を展開し、法学会のエースと言われた。六八年、東大学長代行に就き、六九年度入試の中止と機動隊導入による占拠学生排除を決断した。

のち東大学長となり、七四年に再び教授として教壇に立った。八三年退官後、成城学園長、法制審議会民法部会の会長を務めるかたわら、弁護士としても活動した。

本郷の東大キャンパスは広い。あちこちに学舎が建っている。すべて、とはいわないまでも、多くの建物に学生が立て籠もっていた。

その数、約四千。

一月十六日早朝から、警視庁機動隊八千五百人が出動して、建物を一つ一つ〔解放〕していった。中世の城攻めでいえば、出城や砦を潰し、本城を裸にするのと同じである。寄せ集めの軍兵が立て籠もる大阪城を、徳川家康が攻め落とした、その現代版であった。

三

紺色のヘルメットに冬の光を反射させて、機動隊が安田

講堂の封鎖解除と学生の排除を始めたのは、十八日早朝である。これに学生たちが石や火炎瓶を投げて抵抗した。

このとき、御茶ノ水界隈の路上でも、学生たちが激しい投石を繰り広げていた。東大構内に突入し、背後から機動隊を襲おうと図ったのだ。

しかし彼らは、警備車の列を突破するに足りる強力な機動力を持っていなかった。路面のコンクリート・ブロックを打ち崩しては投げ、放水の圧力に撥ね飛ばされることを繰り返すだけだった。

一部のはねっ返りたちが鉄パイプ爆弾を考案し内ゲバで自滅していくのは、これ以後のことである。

上空に舞うヘリコプターの音と機動隊の放水をバックに、東大出身の評論家大宅壮一が、何か分かったような分からないようなことを言っていた記憶にある。分厚い生地のオーバーを着た加藤一郎がマイクで呼びかけた。

「私は東京大学学長代行の加藤一郎です。学生諸君、抵抗をただちにやめなさい……」

学生たちは答えなかった。

翌十九日、電気カッターでバリケードのシャッターを切り開いた機動隊員が突入し、階を制圧するごとに白い旗が振り立てられた。催涙ガスで目と喉をやられ、びしょ濡れになった学生たちが引きずり出された。その一部始終をテレビは中継した。検挙者三百七十四人。

東大はすでに、全学部の入試を取りやめることを決定していた。戦国の世であれば講堂に立て籠もる学生たちをじっくりと遠巻きにし、兵糧攻めで降参させる方法もあるのだが、そうは行かないところが現代というものだった。

全国の大学の頂点に立つ東大が学生の不法占拠を野放しにしているわけにはいかなかった。新学期は〝正常〟な状態で迎えなければならない。そうでなければ、示しがつかないであろう。

これと同じことを、筆者は同じ年の十月に体験した。

九月十四、十五日に予定されていた文化祭を前に、一部の生徒が校長室を占拠していた。生徒から集めている図書館費の使途を明確に示してほしいというのが生徒側の要望だった。

筆者が通った高校が生徒自治会の力がもともと強く、学内の運営は教職員と自治会が共同で行うという暗黙の了解があった。だから図書館費の使途を明らかにせよ、という生徒側の要望は、生徒から見ると至極当然に思われた。

なぜ校長が

――それはキミたちが関与する問題ではない。

と突っぱねたのか。

交渉というより平行線の話し合いは夜半まで及んだ。

――今日はこれでいったん打ち切ろう。
と校長が言い、
――ちゃんとした回答が出るまで、私たちは動かない。
と生徒側が言った。
――それじゃ、好きにしたまえ。
と捨て科白を残して校長が去った。少なくとも教育者にあるまじき対応だった。
そのまま占拠が続いたので、校長側は
――正常な状態で文化祭を迎えたい。
と申し入れた。
東大闘争のときもそうだったが、何が正常なのか、という議論はまったく行われなかった。それまでの規律と秩序に戻すこと、それが正常であるという理屈は、事態を硬化させた原因が解決されない限り通じるはずがなかった。
保守頑迷な秩序重視の考え方が事態をさらに悪化させることに校長側は気がついていなかった。
彼らは自力で生徒たちと立ち向かうべきだった。生徒たちをぶん殴って暴力教師と謗られようとも、断じて警察力に頼るべきではなかった。彼らは教育を放棄し、体制に阿った。
「一〇・二一国際反戦デー」は、前夜から小ぬか雨が降る肌寒い日だった。
「国際反戦デー」というのは、そもそもは日本労働組合総評議会（総評）が、六六年に始まったアメリカ軍による北ベトナム爆撃に抗議するため、その最初の作戦が発動された日をそう名づけたのだった。
だからこの日には、いわゆる「過激派」のジグザグデモと、赤旗をたなびかせた総評の順法デモが全国で繰り広げられていた。
機動隊員を乗せた装甲バス、通称「カマボコ」が出動することに、市民は慣れっこになっていた。前の晩、机や椅子で組み上げられた高校のバリケードの中を撮影して歩いた。そこに活動の中心を担った同級生がやってきて、
――しっかり記録しておいてくれ。
と声をかけた。
そのとき撮影したモノクロのネガは現在も手許にある。校舎に立て籠もるほどの勇気はなかった。整然と力攻めに突き進む紺色のヘルメットの群に、ロックアウトされた塀越しに罵声を浴びせるのが精一杯だった。
彼らの一隊が向ってくると、蜘蛛の子を散らすように逃げ帰った弱虫な部隊だった。当時、「高校版ミニ安田講堂事件」としてわずかにマスコミをにぎわした。

～～～～　補　注　～～～～

アラブ石油輸出国機構　Organization of the Arab Petroleum Exporting Countries：ＯＡＰＥＣ
石油開発資本をアメリカ、ヨーロッパ諸国に牛耳られていることに対抗し、中東諸国が結束して主導権を奪回するために結成された。友好国、非友好国の判定に基づいて輸出価格と輸出量を決定したために原油価格が一気に四倍以上に跳ね上がった。加盟国はサウジアラビア、クウェート、リビア、アルジェリア、アラブ首長国連邦、カタール、バーレーン、イラク、シリア、エジプトの十か国で、原油問題ばかりでなく食糧や医療、教育といった問題や、地雷の撤去、国際テロ防止など広範に及んでいる。本部はクウェートに置かれている。

テト攻勢　「テト」はベトナムの旧正月のことで旧暦に従うため太陽暦では毎年異なる。ベトナムで一番にぎやかな年中行事とされ、大晦日に当たる前日を含め三～四日が休日となる。一九六八年のテトは太陽暦の一月三十日だった。アメリカで「Ｔｅｔ」といえば六八年一月二十九日から二月二十五日まで行われた北ベトナム軍・南ベトナム解放民族戦線の大攻勢を指すといわれるほど、ショッキングな事件だった。

米空母「エンタープライズ」の佐世保寄港　「佐世保エンプラ事件」と呼ばれる。初代のエンタープライズは一九三八年に就役し太平洋戦争全期を通じて最も活躍した航空母艦だった。このことから「ビッグＥ」の異名を取り、初代退役後の一九六一年、初の原子力空母として就役しアメリカ太平洋艦隊の旗艦となった。航空機以外の兵装を装備しないのも特徴となっている。排水量八万五千六百トン。

ベトナム戦争のアメリカ軍支援に向かう途中、佐世保港に立ち寄って補給を受けることになっていたが、核兵器を搭載している疑いが強く、日米安全保障条約の事前了解事項に抵触するとして社会党、共産党が寄港反対を表明していた。一月十五日三派全学連中核派が法政大学構外で機動隊と衝突し凶器準備集合罪で百三十一人が逮捕されたのをはじめ、博多駅前や佐世保市街で反米・反戦・反帝国主義を唱える学生デモ隊と機動隊が衝突を繰り返した。

一月十九日、空母「エンタープライズ」、原子力駆逐艦「トラクストン」、通常駆逐艦「ハルゼー」の三艦が佐世保港に入港、同日霞が関の外務省に過激派学生が乱入して一部を占拠する事件が発生した。また二十一日には佐世保で社会・共産両党による二万人集会が開かれ、三派全学連学生がアメリカ軍佐世保基地に突入を図るなど混乱を極めた。このとき日米安全保障条約に定める核兵器持込みの事前協議はアメリカ軍が軍事上の機密を理由に情報を秘匿する以上、事実上不可能であること、学生デモ隊や報道陣に対する機動隊の過剰警備が国民の目に映し出された。

キング牧師　Martin Luther King Jr.／１９２９～１９６８。ジョージア州アトランタのバプティスト派牧師の家に生まれ五五年ボストン大学神学部で博士号を取得した。同年十二月モンゴメリーで発生したローザ・パークス逮捕事件に抗議して、モンゴメリー・バス・ボイコット運動を指導し、五六年バス車内人種分離法違憲判決を勝ち取った。これ以後、アトランタでバプティスト派教会の牧師をしながら、全米各地で公民権運動を指導した。

六三年四月アラバマ州バーミンハムでの抗議デモで市警に逮捕され、同年のワシントン大行進で「I have a dream（私には夢がある）」の演説を行い、人種差別の撤廃と各人種の協和を訴えた。六四年十月非暴力抵抗運動に対しノーベル平和賞。六八年四月テネシー州メンフィスで暗殺された。暗殺されたのは宿泊していたホテルのバルコニーだった。

小笠原諸島　東京から南約一千二百キロの太平洋上に浮かぶ大小約三十の島で形成され、婿島、父島、母島、火山の四つの群島に分けられる。その名前は文禄二年（一五九三）信濃国松本城藩主の小笠原貞頼の一行が探検し物産を徳川家康に献じたという記録に依っているが、信憑性を疑問視する向きもある。

確認が取れる最も古い記録は江戸時代の寛文十年（一六七〇）遠州灘で遭難した紀州のみかん船が漂着し、父島―母島―婿島を経由して八丈島に帰還、下田奉行所が行った聞き取り調査である。以後無人状態が続き、アメリカやイギリスの捕鯨船が薪や水を補給するために立ち寄った。嘉永六年（一八五三）にアメリカ合衆国とイギリスの間で領有権の争いが発生したが、文久元年（一八六一）江戸幕府が八丈島から三十人の日本人流刑囚を島に居住させて日本領として認知され、一八七六年（明治九）正式に日本領となった。

明治から昭和初期まで硫黄の採掘を中心に住人が増加し、太平洋上における軍事的・戦略的価値が高まるにつれ軍属家族約七千人以上が住むようになった。第二次大戦の際、住民約八千人は強制的に本土に移され、諸島は完全に軍事基地化された。ことに太平洋戦争末期にはアメリカ軍の日本本土上陸に不可欠の軍事拠点とされ、硫黄島で日本兵約二万人が玉砕する激戦が展開された。戦後の四七年、旧島民による「小笠原帰郷促進運盟」が結成され、五一年の日米安全保障条約締結を機に日本への返還運動が本格化した。返還は六七年の佐藤―ジョンソン会談で決定されたが、それまでの間、父島にアメリカ軍のミサイル基地が建設され核兵器が装備されたこともあった。

返還後、旧島民の帰島が許されたが、人が居住しているのは父島と母島のみで、硫黄島を中核とする火山列島は危険で居住に耐えないとして気象観測など公務に就く人が一時的な滞住を許されている。

北爆停止　一九六八年一月三十日から二月二十日にかけてのテト攻勢で戦争の継続を断念したジョンソン米大統領は、三月三十一日、次期大統領選への不出馬と北爆の一時停止を表明し、フランスのパリで北ベトナム政府代表団と和平交渉に入ると発表した。五月十三日から始まったパリ和平会議でアメリカは北爆再開をちらつかせつつ少しでも有利な条件で戦争を終結しようとしたが十一月にいたってついに北爆停止に踏み切った。

パリ五月革命　第二次大戦後、フランス政府は大学の規模を急速に膨張させたが雇用が追いつかず、大学を出ても働く場所がないという状況が生まれていた。一九六八年三月、政府の施策に不満を訴えていたパリの学生たちが南ベトナム民族解放戦線支持のデモを行い、これをドゴール政権が威力鎮圧しようとしたことから一挙に大学紛争に発展した。

ソルボンヌ大学を中心に始まった反政府デモ行進・ゼネストには学生八十万人、労働者役一千万人が参加、五月十一日、アメリカ政府と北ベトナム政府の和平会議を前にパリ郊外の大学街で学生デモ隊と警察隊が激しく衝突し、銃撃戦となった。始めは事態

を楽観視していたドゴールは五月三十日に議会を解散させる強硬策に出て一度は収拾するかに見えた。

しかし翌六九年一月三十日朝、ソルボンヌ大学の女子学生フランシーヌ・ルコント（Francine Lecomte）がベトナム戦争とビアフラの飢餓問題に抗議し焼身自殺を遂げたのを機に反政府運動が再燃した。四月末、ドゴールは退陣を表明し、結果としてパリ・カルチェラタン、学生コミューンが勝利した。

これをきっかけに日本で「カルチェラタン」という言葉が流行した。また翌六九年には新谷のりこ作詞・作曲・歌の「フランシーヌの場合」がヒットした。

郵便番号制度　六八年からはがき、封書に五桁の番号を付けるようになった。日本人が急に手紙好きになったとか文通のブームが起こったからではなく、一つにはダイレクトメールの急増、一つには都市・住宅開発の結果だった。はがきや封書に記された手書きの数字を瞬時に読み取って仕分する装置はＯＣＲ技術の転用だが、読み取り位置の修正や読み取り中のジャムやずれの防止にたいへんな苦労があった。第一号機を開発した東芝は次のように記録している。当社は昭和四十年、郵政省当局の指導のもとに、機器事業部（当時：柳町工場）と総合研究所（現：研究開発センター）がプロジェクト・チームを編成、まず郵便局内の作業を系統的に分析から着手し、郵便物自動読取区分機（ＴＲ）、郵便物自動取揃押印機（ＴＣ）、郵便物自動選別機（ＴＳ）の順に開発を推進した。昭和四十一年には制限手書数字を読取る最初の試作機が完成、ついで自由手書数字の読取りについて委託研究を受け、全国から集められた千差万別の手書き文字を分析、その可能性を報告、続いて昭和四十二年に総合研究所の光学文字読取技術（ＯＣＲ）を使用して、ついに世界初の手書き文字を読取る試作機ＴＲ―２型を完成させた。

九八年には超高層ビルや大型マンションの増加に対応し上三桁＋下四桁の七桁による番号制度に移行している。

心臓移植　初めての移植手術が行われたのは一九六七年十二月、南アフリカ共和国（現・ジンバブエ）のケープタウンでクリチャン・バーナード医師が執刀した。心臓を提供したドナーは黒人女性、移植手術を受けたレシピエントは白人男性で、術後十八日目に死亡している。このとき医療関係者が「人に最も近い形をした臓器を使った」と発言して人種差別問題が問われ、同時に「ヒトの死」の判定をめぐる議論が宗教界を巻き込んで起こった。

翌年八月、札幌医科大学で和田壽郎（わだ・じゅろう／１９２２～２０１１）医師の執刀による国内初、世界で三十例目の心臓移植手術が行われ、移植手術を受けた十八歳の男性は術後八十三日目に死亡した。医学界、宗教界が「ヒトの死」の判定に明確な基準を示していなかっただけでなく、臓器移植に関する法的裏づけがなかった段階での手術だったため、和田医師はその後、殺人罪で告訴されたが不起訴処分となった。

ソ連軍のチェコ侵攻　第二次大戦後、チェコスロバキア（のちチェコ共和国とスロバキア共和国に分国）は共産党第一書記兼大統領であるアントニーン・ノヴォトニー（Antonín Novotný／１９０４～１９７５）の独裁体制にあったが、六〇年代に入って反ノヴォトニーの市民運動が活発になった。その背景には経済の低迷、貧困、食糧難などがあった。

六七年に行われた第四回チェコスロバキア作家同盟大会で文化人が党批判を表明したのをきっかけに学生の反政府抗議行動が起

こり、これに労働者が参加して暴動状態が生まれた。ノヴォトニー政権は軍と警察を動員して鎮圧したが国民の支持を得られず、六八年一月に党第一書記のアレクサンデル・ドプチェク（Alexander Dubček／１８２１～１９９２）に政権を譲り、民主化に向けた改革がスタートした。東欧諸国を「自由主義の防波堤」と位置づけていたソ連のブレジネフ（Leonid Il'ich Brezhnev／１９０６～１９８２）は体制を揺るがしかねないと判断し、同年六月、ワルシャワ条約機構の軍事演習を名目にソ連軍を動かしてチェコに侵攻し、反政府・自由化運動家を逮捕・監禁、公職から追放するなどして思想弾圧を図った。一連の出来事を「プラハの春」、六八年六月のチェコ侵攻を「チェコ事件」と呼ぶ。

川端康成　かわばた・やすなり／１８９９～１９７２。大阪に生まれ、十五歳で孤児となり親戚の家に寄宿したり寮生活を続け、第一高等学校、東京帝国大学に進んだ。東大在学中、一九二一年（大正十）級友らと第六次「新思潮」を刊行、二号に掲載した「招魂祭一景」が菊池寛に認められた。二四年横光利一、片岡鉄兵、今東光らと雑誌「文芸時代」を創刊し、昭和初期に新興芸術派の中心的な存在となった。『伊豆の踊子』『雪国』『千羽鶴』『山の音』『みづうみ』『古都』などの代表作がある。六八年に日本人として初のノーベル文学賞を受賞している。五七年日本ペンクラブ会長として国際ペンクラブ東京大会開催に尽力し、翌年国際ペンクラブ副会長。三五年から鎌倉に住み、久米正雄、高見順らと「貸本屋鎌倉文庫」を開くなど鎌倉文士の中心となって活躍した。

明治百年祭　明治改元の布告が出された陰暦明治元年九月八日から百年目に当たるとして、一九六八年十月二十三日に政府主催による記念式典が日本武道館で開かれた。この式典については七月十日に歴史学研究会・日本史研究会など歴史関係五十四の学会・研究会が反対声明を出し、社会党や共産党は「過去の歴史を美化するもの」と反対、両党議員は欠席した。全国各地で自治体主催の記念式典が行われたが、一般国民の関心は薄く全く盛り上がらなかった。

三億円事件　一九六八年十二月十日午前九時二十五分ごろ、東京府中刑務所横・北側外塀監視所の付近で東芝府中工場の従業員のボーナス約二億九千四百三十万円の現金を乗せた日本信託銀行国分寺支店の現金輸送車が白バイの警官に停止を命じられた。警官は「現金輸送車に爆弾が仕掛けられたという電話があったので調べる」と告げ、銀行係員四人を降ろし車の下に潜り込んだ。しばらくして警官が車の下から出てきて「爆発する。危険だから下がって」と叫んだ。

四人の銀行員が刑務所の壁まで下がって避難すると、警官は現金輸送車の運転席に乗り込み、車をスタートさせた。四人は車を安全な所へ移動させるのだと思って眺めていたが、車はそのまま走り去ってしまった。事態に気がついた銀行員が刑務所監視所に急を知らせ、同刑務所職員が一一〇番通報して警視庁は緊急配備を敷いたが、一時間後に現場から二・五キロ離れた場所で発見された現金輸送車に現金輸送ケースはなく、犯人が乗換えたとされる白いカローラ（数日後、乗り捨てられた車両が発見された）からも犯人の足取りはつかめなかった。

現金輸送のスケジュールを熟知していたことから銀行関係者、付近のカーマニア、反政府系暴力革命主義組織など多くの人々が取り調べられたが、事件の発生から七年後に時効となった。紙幣の番号はすべて控えられていたがいまだに一枚も発見されていな

いので、犯人は三億円を盗んだだけだったことになる。

南ベトナム解放民族戦線　一九六〇年十二月、当時の南ベトナムにおけるゴ・ジン・ジェム（呉廷琰／Ngô Đình Diệm／１９０１～１９６３）政権に反対する民族主義者が結成した「ＮＦＬ」（National Liberation Front）のことで、結成当初は反米・反軍事政権、民族統一を全面に掲げていた。六五年にアメリカ軍が北ベトナム空爆を開始したのをきっかけにホー・チミン（胡志明／Ho Chi Minh／１８９０～１９６９）政権との連携を強め、ソ連や中国の支援を得るようになった。一般に「ベトコン」と呼ばれた。「ベトナム・コミュンテルン」の略とされるが、正しくはベトナム民族の政治的統一・共生を意味する「越共」（Viet Cong）である。

倉石忠雄　くらいし・ただお／１９００～１９８６。長野県に生まれ一九二五年法政大学を出てロンドン大学に留学した。四七年総選挙で自由党から立候補し当選、鳩山内閣、岸内閣で労相、池田内閣、佐藤内閣で党労務問題調査会座長、農相、田中内閣で農相、三木内閣で党公労法問題調査会座長を務めた。

橋本　治　はしもと・おさむ／１９４８～２０１９。東京都に生まれ東大在学中、東大五月祭のポスターでコピーライター、イラストレーターとして注目された。のち小説、映画、舞台にも才能を発揮している。『桃尻娘』（七七年）で小説現代新人賞佳作、『花咲く乙女たちのキンピラゴボウ』（七九年）、『完本チャンバラ時代劇講座』（八六年）、『桃尻語訳　枕草子』（八七～八八年）などユニークな小説、エッセイ、古典翻案は社会考察力に富んでいた。

加藤一郎　かとう・いちろう／１９２２～１９９６。東京に生まれ、戦時中の特例で繰上げ卒業となった。特別研究生を経て五七年三十五歳の若さで東大教授に任官した。土地、家族、農業、交通事故、公害・環境汚染、医事、金融など時事的課題に法律がどう対処すべきかを重視する利益衡量論を展開し、法学会のエースといわれた。六八年、東大学長代行に就き、六九年度入試の中止と機動隊導入による占拠学生排除を決断した。

日本IT書紀　165 １９６９・東大

著　者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
http://www.ossaj.org/
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。